名稱

岬

岬ハ、ミサキト訓ズ、又埼、碕、崎等ノ字ヲ書シテ、サキトモ訓ゼリ、卽チ陸地ノ長ク海中ニ突出シタル處ヲ謂フナリ、

〔倭名類聚抄一山谷〕岬　唐韻云、岬山側也、古狎反、日本私記云、三左木

〔箋注倭名類聚抄一山石〕岬、見仁德三十年紀、繼體紀島曲、本注云、謂海中島曲碕岸也、俗云美佐祁、又古事記有御大之御前、神代紀上有熊野之御崎、下有吾田笠狹之御碕、按神武己未年紀、丘岬此云塢介佐棄、仲哀八年紀亦訓佐幾、然則三佐木之三、美稱耳、佐木與鋒前訓同、又按三佐木、謂陸地長突出海中之處、以訓山側之岬字、當之不允、文選江賦注、引埤蒼曰、碕曲岸頭也、新撰字鏡、碕訓石之出太留佐支、是訓碕字爲允、○略中　廣韻同、但岬作碑、玉篇碑亦作岬、按文選吳都賦注、引淮南子許愼注云、岬山旁、孫氏蓋本之、又按古無岬字、蓋从山从胛省、會意字、

〔書言字考節用集二乾坤〕崎（サキ）碕、隮、埼並同、前漢書註、曲岸頭也、

〔倭訓栞前編三十美〕みさき　日本紀に碕字、岬字などよめり、大先の義成べし、倭名抄には汀をもよめり、水先の義にや、

〔倭訓栞前編十佐〕さき○略中　日本紀に碕字、岬字を訓ぜり、先の義なり、今人、崎字を用るは非ず、伊藤氏も崎只有崎嶇之義、而不見洲觜之義といへり、新撰字鏡には、碕を石の出たるさきとよめり、日本紀に迮をよめり、せば反さ也、迮は與窄通、迫也狹也と見ゆ、

〔古事記傳十二〕御前は、凡て山にまれ海邊にまれ、物の鋒（サキ）の如く突出たる處を云、埼、崎、碕、岬等の字を用ひたり、